徳島福祉リサイクル かわら版 第二号

一九八八年八月

太陽と緑の会・徳島福祉リサイクル／〒七七九－三一 徳島市国府町南岩延／☎〇八八六（四二）一〇五四／毎月五日発行／代表：近藤文雄／責任者：杉浦良

あいさつ　　編集部

厳暑の季節。創刊号に続いて第二号をお届けします。本紙では、当会の活動内容の報告とともに、地域社会や社会福祉を考える視点の提供を考えています。内容についてのご意見、ご批判等ありましたら、お寄せ下さい。

『松直棘曲』

城満寺住職　大槻哲哉

日本は今戦後四十年を経たので、そろそろ後遺症を脱して、日本人の意気を世界に示す時が来てるのです。そして示さなければならないと思うのです。エコノミックアニマル、GNP第二位、経済大国、使い捨て等を程よく中和して、人柄の良さで認められ、日本人であれば裸でも世界の人々が受け入れてくれる様に、今すぐにはならなくともこれから十年先にはそうなる様に、一人一人が努力して貰いたいのです。政治も宗教も教育も一つになってそれを指導する必要があります。

私が托鉢に出て何時も思うのは、たばこのすい捨て、車中のすいがら入れから道路わきへの抛棄、あき缶等の車中からの投げ捨て、ごみの不法投棄、それらと一緒にした残土処理の仕方等を改めて貰いたい。後世子孫が何時何処にでも安心をして家を建て、住める様にしておかなければなりません。国を愛し国土を護って行く様にお願い致します。

これまで「消費は美徳」の言葉が許されてきましたが、真は資源に限度があるのですから大事にして、物の無駄な浪費と処理を、無意味な余剰生産を徐々にやめなければなりません。使い捨ての粗い消費は生活を粗雑にし、心を荒ませるのです。己が徳分をも一緒に捨てない様にしましょう。城満寺では腐蝕するものは堆肥に、燃えるものは風呂の燃料にし、くさらぬものはそれなりに工夫をして処を得た廃物利用、処置をして二十年、缺乏を感じず充分に足る以上の生活をしてきましたし、金銭や物に遮られぬ透明快適な日々を過ごしてきたのです。ここで神仏の意に適い、子子孫々幾世迄も繁栄する様に、未来を考えて現在の安逸を少し加減し、子孫の為に犠牲にしましょう。お釈迦さまのお弟子阿難尊者へ、ウダーナ王・王妃サーマバティが法話のお礼に五百領の衣を布施しました。阿難はこれを受け取り同僚の釈尊のお弟子達に配りました。この事を知った大王は出家として貧り過ぎるのではないかとなじりました。

ウドーナ（王）　大徳はその様な多くの衣を如何様に処置せられるか？

（阿）難尊者　大王よ私は衣の破れた弟子達に分ち与えます。

王　その破れた衣を如何にせられるか

阿　破れた衣で床布を作ります

王　古い床布を如何にせられるか

阿　枕のフクロを作ります

王　古い枕のフクロを如何にせられるか

阿　敷物を作ります

王　古い敷物を如何になされるか

阿　足拭きを作ります

王　古い足拭きどうなされるか

阿　雑巾にいたします

王　古い雑巾はどうなされるか

阿　大王よ私共はその雑巾をこまざき泥に混ぜて壁の塗込みに用います

王　宣いかな　大徳よ仏の御弟子等は善く物の利用を心得て居られる

――王は感じ入ってその場を去った。

悟ある人は、無駄をしない、生活を乱さないで、自信をもって生きる。

荒川流のボランティア活動

荒川　大

「ボランティア活動」というと、「報酬を求めずに手助けをしてあげる活動」などといいますが、私はいま、「ボランティア活動（と言えたらの話ですが）」に、報酬を期待しながら取り組んでいます。

精神的にも、肉体的にもシンドイ活動を報酬もなく、義務感だけで続けていくことは私にはできません。自分の都合の良い時に、自分の好きなことをして、「私は人のためにいいことしたのよ」と、満足できれば、別ですが・・・・。

さて「報酬」といっても、お金や物品ではありません。もっともっと大切な精神的な報酬です。手助けに対する感謝の気持ちとか、自分の行った事に対する反応、批判、新しい発見等いろいろあります。

たとえば、ある人の車イスを押したとします。その人が、「ありがとう」の一言、態度を表してくれたら、他には何もいりません。「押すのが当然よ」と思っているなら、押さないでしょう。

「ボランティア活動」は、自分と相手が互いに利益を得られることが、大切であり、長続きの秘訣だと思います。

いま、私は福祉リサイクルで共同生活をしながら活動しています。自分なりにみんなのこと（つまりは自分の事でもあるわけですが）を考え、一〇〇％活動しています。それを、一年間ボランティアだから当り前と思っているならば、私が活動する意味は、存在しなくなります。

人には、必ずできる事とできない事があります。だから、それを互いに話し合い、補っていける関係を求めて、試行錯誤しながら「荒川流のボランティア活動」を実践してみたいと思っています。

ご意見、お待ちしています。

＜付＞荒川君は、日本青年奉仕協会から派遣された一年間ボランティアとして、福祉リサイクルの活動に参加しています。長野生まれ、土の香りのする青年です。

【社会福祉関係文献の紹介】

＊賀川豊彦「死線を越えて」

＊河上　肇「貧乏物語」

二冊とも、戦前に発表された。賀川は今年、生誕百年を迎え、再評価の動きも起こっている。「死線を越えて」は自伝的色彩の濃い作品である。賀川は少年期の数年間を徳島で過ごした。父の実家の所在が現板野郡だった。作品の冒頭には当時の徳島市内の様子、そして吉野川橋が架橋される以前の古川の渡し場の情景が詳しく描かれている。賀川はキリスト教への信仰が深い。やがて、社会派のヒューマニストとして成長する。神戸の葺合町の貧民窟に空き家を借り受けて、住み込む。作品の中心は、そこでの活動を物語る部分だ。賀川には伝道者としての自らの役割を重んずる気持ちも強いが、彼の心情はそれに収まり切らない。貧民窟を蠢く、一見得体の知れない人たちと個人的なつきあいを深めてゆく。期待や約束を何度裏切られても、彼は路上に出て所在の定かならぬ人を訪ねる。彼の住まいにも助けを乞う人が絶えない。豪雨の路上、彼は狂気のような風体で貧民窟の救済を願う。しかし、肺を病んだ身体が倒れ伏してゆく。人間の限界と勇気を専ら語りかける場面だ。賀川は健康を取り戻すと、また同じ活動に入る。

河上の「貧乏物語」は、戦中の厳しい検閲にひっかかった。当時発行の原著では黒く塗り潰された個所が目立つ。河上はマルクス主義者だった。しかし、貧困を単なる経済的現象とは考えなかった。人の意識や生活態度が正しい方向を見失った結果、ある社会層に貧困が生ずるのだと考えた。貧困には、人の心の持ち方が大きく関与することを指摘している。この観点は、現在の社会科学者、例えば大塚久雄らに受け継がれ、福祉理論にも有益な切り口を与えている。

賀川も河上も後年の理論や実践はやや精彩を欠く。しかし、今の福祉理論や実践がそれを凌駕しているとは思えない。

私の体に怒りが走る。苛立ちを飲み込むより、嘔吐しはじめる。名田さんの体がピクッと反応する。疲労感の澱んだ目の奥に、少しづつ嫌悪がのぞく。それでも黙って動き始める。しかし、よけいにぎこちなくなる。ぎかちなくなった分だけ、作業がチャランポランになる。

「ドアホー！」

私の怒声。名田さんの口元から、ようやく聞き取れるほどの怒りが飛び出す。激情を口元にためた表情がある。

普通ならば喧嘩になるところだが、名田さんの今までの歴史はそうでない。多分、こんな場面に山ほど出くわしたのだろう。怒声で理解できるのならば、今の名田さんはない。私のどうしようもない怒りと、名田さんのどろどろした蠢くばかりの嫌悪に、深夜の雪が降りかかる。見上げた天空に、星はない。

私は一人で作業に取りかかる。寒空の沈黙。想念が私を包み込む。

「何の為に、こんな事をせんといかんのか」

体の奥底に潜むエゴイズムと偽善が、顔をもたげ出す。甘さのあるロマンティシズムを打ちのめす。吐く息だけが白い。

名田さんが私の動きを見つめている。

「何んでこんな事せんとあかんのか」

彼の心の内にも、別の意味のエゴイズムが蠢く。彼には両親が無い。母親の入った仏壇が、古びたアパートに一つあった。

「盲学校入学の時には、前から三番やった。出る時は後からだったわ。よう赤点取った」

そんな言葉に彼の人生が見え隠れする。彼の父親は、当時としてはハイカラで、ラジオやバイクなどを商売していたらしい。地域ではハイクラスな位置だったに違いない。その父親が、彼の母親を、後妻としてもらうようになった。美人で女給をしていたらしい。彼の目元は、母親の面影を残している。父親が先に死に、母親と二人だけが放り出される。彼の心に、大きな澱みができた。心を閉ざす事と、自閉的な傾向が重なった。酒と盗癖、性問題などが首をもたげる。名田さんの場合、障害の問題というより、人生の問題ともいえる。彼にはもう甘えて行く所が無い。ネオンの巷に身をまかせ、一抹の解放をあぶくの如く追い求める。彼の肉体をまだらに染めたネオンサインが、存在そのものを稀薄にする。

桜吹雪のような雪が舞う。

私の心と名田さんの心に、ポッカリと穴があく。あいた穴に、雪と風が容赦なく吹き込む。私の存在が脆く崩れそうになる。

「今迄の私は、何だったのか」

そんな問いさえ、薄氷のように融け出す。

肉体もそして精神までもが、疲労に打ちのめされる。・・・・・・

「フー」と、あてどない溜め息をつく。白い息とともに、怒りもエゴイズムも、そして甘いロマンティシズムも軽くなった気がした。

また一人で作業に取りかかる。

軽くなった私に、名田さんが反応し始めた。二人が、黙々と作業にかかる。私はかじかんだ指に煙草をはさむ。雪夜の一服。煙が雪に絡まる。

「名田さん、お疲れさん」彼に表情が戻る。雪道を二トントラックでくだり始める。

私。「しんどかったナー」

名田さん。「ホンマや、お疲れさん」

午前零時をまわる。細い糸が繋がった気がした。

「関係の拡がり」イメージ論 ①

杉浦 良

昭和五十九年十二月二十九日。夜十一時。粉雪が舞っている。サーチライトに照らされて、無数の虫が夜空にむらがっている様だ。徳島市のはずれにある入田町月の宮に、太陽と緑の会の元豚舎がある。私は八月に徳島入りし、ここで福祉リサイクルの活動をスタートさせようと思っていた。当初の構想通りに、進む筈はないと思いながら。

「名田さん。この荷物を全部降ろして、整理し、焼却するものはしとかんと、明日残っている回収に行かれへンゾ」

十一月にようやく、九万三千キロ走っている、イスズエルフ二トンを三十万で購入できた。一台しかないので、全部降ろしてからの回収になる。予想を上回る回収量と、処分しなければならない量の多さで、今の時刻になった。防寒衣を着ていても、外の作業だから、寒さが身に浸みる。名田さんの動きが、もう勘弁してくれと言っている。言葉数も少なくなる。たった二人の作業だ。手の感覚がなくなってきた。私は少しづつ、苛立ち始めた。何故こんな事を・・・・・・・・・・・。

私は自問し始める。心の内の葛藤。

十二月に入ってから、毎日がこんな調子だった。弱視の為、盲学校を出て、マッサージをしていた名田さんが、行く所がなくなり、一緒にやるようになった。当時三十五才。ここに来て、一箇月が過ぎる。給料なし。当然、私もこの四箇月、給料はない。手弁当だ。収入がガソリン代などで消えてしまうので、当然といえば当然だ。今迄、室内のマッサージしかやっていない。色は白く、体全体がホヤッとしている。こんな重労働になると思っていないから、名田さんが音をあげるのもあたり前の事。

当時、私は、普通の公立及び社会福祉法人の施設に、絶望していた。以前働いていた施設での『痼り』のような物が、そうさせていたのだろう。

「こいつはあかん、何をやらしても駄目だ」と言われてきた人達にも、なるべく自分を生き生きさせる方向さえ見つかれば、それが目を見張るような動きにつながる。それが自信と自負心にも広がる。それにはまず、自分達の事は、なるべく自分達なりに考え、やれる事をやりながら、それを地域社会の中で日常的な相互活動にまで拡げて行く事で・・・・・・・。

そんな想いが、福祉リサイクルのイメージに繋がった。何も無い所からのスタートでは、こんな形しか想い浮かばなかったのも事実だ。

全てが初めてのチャレンジだった。地理すら初めて、トラックの運転、回収は別として、修理、再生、解体するものも、どの程度のものを、どこまでという事になると、全くの素人だった。スタートし始めると、現実に追われる。私も素人ならば、名田さんも素人。ましてや、私がリードしなければならない位置にある。解ったつもりでも、迫り来る現実の前に打ちのめされる。疲労感が二人の内に澱んでくる。こういった時、私の福祉リサイクルの、漠とした全体のイメージより、細部の具体的現実をどう処理するのかの能力が、とことん試される。一人一人の個々のケースをどうするかという事よりも。

「名田さん。いいかげんにしてくれ！」

「これは焼却処分だと言ったばかりじゃないか」

「ちゃんと聞いとるのか！」

協力者名簿（一九八八年七月）

敬称は省略させていただきます

＊回収先

［徳島市］　サロン・ド・ルイ、宮崎、越久、大東、西村、掘田、内田、宮井吉島、奥村、富崎、岡田、吉川、大木鈴江、阿部、岡山電気、須摩、高橋、佐保、矢野、掘江、釜心、丸山、内浜三笠、後藤、浅野、南、西原、竹田、徳島市児童福祉課、日本プラム、酒井みどり家庭保育園、斎藤、谷、川瀬、岡本、藤井、大村、高本、米原、川上アカホ家具、龍江堂、巽、関本、吉田大倉、前田、高橋、中西、流、日下池村、辻、森、喫茶「星」、板東、寺島、古川病院、和田、児童ホーム、若松、椎野、田村、白川、前田、市川日下部、野中美容院、槙山、笠井、ひまつ、鮎原耕作、浜田、山内、長尾宮本、岡山電気、工藤、岡、柳生、

［羽ノ浦］福田、

［小松島市］多田、豊永、

［松茂町］大村、上龍、

［藍住町］村上、

［石井町］秋本、西崎、

＊持ち込み者

［徳島市］西川、井原、内浜、鎌田、橋、谷、藤原、佐々木、梯、渡辺、久次米、吉野、藤田、中東、

この他、近藤整形外科を通じても不要品の寄贈をいただいております。今回は紙面の都合でお名前を省略させていただきます。

＊寄付者

［徳島市］　原田（二千円）、岡本（三千円）、高橋（千二百円）、小松（三千円）、大村（二千円）、井沢（千円）、酒井・渡辺（二千円）、

御協力、ありがとうございました。

なお、当店は、八月十三日～十七日までお盆休みと致します。御了承下さい。

インフォーメイション

①ワープロ寄贈について

本紙は、徳島東ライオネスクラブより寄贈していただいた機種ＳＷＰ－３１０のワードプロセッサーで作製しております。多方面に有効な活用を考えております。どうもありがとうございました。

②福祉施設よりの園外実習の受け入れ

七月四日より二九日まで、精神薄弱者収容施設「おおぎ学園」から、二名の園生が実習に通いました。筧君と笠井君です。我々スタッフとともに、張り切って作業に取り組みました。今後も、おおぎ学園からは毎月二名づつの園外実習が予定されています。

③国府店の営業内容

＊営業時間　午前十時～午後六時（水曜日定休）

なお、回収は土曜日定休。

＊販売品目　家具、電化製品、衣類、雑貨、食器、古本、玩具、アンティック等

④定例バザー

＊日時　八月二八日（日）第四日曜日

午前十一時より。雨天決行。

＊場所　近藤整形外科駐車場

（富田浜二丁目・建設センター隣）

＊販売品　徳島市より譲渡された放置自転車で、修理・再生を終えたものを約二〇台。

⑤太陽と緑の会・定例会の案内

＊日時　毎月第二・第四木曜日

午後八時～

＊場所　太陽と緑の会事務局

（近藤整形外科四階）

⑥賛助会員制について

本紙の定期購読を希望される方には、年会費千円で毎号を郵送させていただきます。なお、太陽と緑の会・徳島福祉リサイクルの口座番号は徳島２－４４７０３です。